

重要な構成要素「^{たちばなや}立花屋」

建築：大正期あるいはそれ以前

参道の景観を構成する要素

「立花屋」は、元々農家として別の場所に居住しており、大正期頃に現在地に出店しました。出店当初から煎餅屋せんべいを営業し続けています。

参道前面に店舗空間が位置し、その背後に居住空間、煎餅製造工場の機能を持つ空間が増築されて、一棟の建築となっています。参道に面した木造平屋平入りひら(注)の部分が最も古く、大正期あるいはそれ以前に建てられたと言われています。主屋から参道に向けて谷勾配の屋根が設けられ、参道に面した部分には店の看板を兼ねたパラペット(手すり壁)が巡らされ、参道に向けて庇ひさしが張り出しています。

参道前面に店舗、その奥の左手に製造の場、右手に居住の場というように、機能ごとに分節された空間からなっており、製造の場と住まいの場の拡張に応じて奥に向けて増築がなされていった様子が明快に示されています。

参道側の外観は、ファサードが連続した参道において、屋根、庇などのまちなみの表情を作る要素によって賑わいを演出しています。



昭和 40 年代（帝釈天題経寺提供）

（注）建物の大棟に平行な面、すなわち平に出入口を設ける建築形式。また、平を正面に向け
るもの。（広辞苑第七版）